

光 学 天 文 連 絡 会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

会 報

No. 47

1987-12-18

光学天文連絡会事務局(東京天文台岡山天体物理観測所)

天文学文藝会

JOINT OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMICAL OBSERVATORY

会報

第4号

1987-12-1

(東京天文台共同) 天文学文藝会

I. 光天連懇談会報告

1987年10月19日午後6時より7時まで、北海道大学・学術交流会館において日本天文学会初日の講演終了後、光天連懇談会が約30名の出席により開催された。司会は安藤祐廣氏。

諸報告

目次

- * ハワイ報告(別報あり) (前原氏報告)
- I. 光天連懇談会報告 1
- II. 第46回運営委員会報告 3
- III. 天文学研究連絡委員会(第13期第7回)会議メモ 4
- IV. 東京天文台改組準備調査委員会(第7回)会合メモ 5
- V. 岡山・木曾観測プログラム相談会報告 6
- VI. ハワイ報告(UH 2.2m 望遠鏡の使用に関して) 9
- VII. お知らせ 10

2. UH2.2m望遠鏡の使用について

ハワイ大学は日本との協力関係を強めることを希望している。JNLITの建設については今後の進展を祝みながら進めるが、UH2.2m望遠鏡の観測時間を10パーセント程日本側に開放することを考えている。(現在でも実質的には10パーセント近くになっているが、これを定常的に保証する) その場合、日本側が

- (1) 財政的、マンパワー的に自立する、
- (2) 観測データの処理もHAWAIIの計算機の時間を圧迫しない、

ことを原則としたい、との提案があった。光天連としては、望遠鏡の有効利用を考えていく上で、この件を十分に検討して行くべきであろう。

3. 家正則氏からのコメント: 西村史朗氏の努力でIRTF/SDASが三度で動き始めた。

* JNLIT・ワーキンググループ報告(家氏報告)

- 1. 対外説明用に東京天文台名で「大型光学赤外線望遠鏡計画」説明書を作製した(10月9日)。10月の天文台教授会の承認を経て文部省、協力者会議などに配布の予定である。
- 2. 63年度海外学術研究として望遠鏡関係の科研費要求を出している。4チームで米国・欧州の視察、情報交換及びハワイ側との交渉を行う予定である。
- 3. 63年3月のESO・VLTワークショップにESOからの招待があり、小平がJNLIT計画の説明に赴く予定である。
- 4. アクティブ支持の実験について
 - 1) アクチュエーターの試作が進み、精度は悪いが応答の速い歪ゲージ型ロードセルと応答は遅いが精度の良い音叉型ロードセルの評価が行われている。
 - 2) 鏡面測定用シャックハルトマン装置の試作が始まった。年内には予備テストを開始の予定。
 - 3) 60cmテスト鏡を用いたスタティックな変形測定及び制御のテストを今年度中に行うよう準備を進めている。

* 仕様書について (安藤氏代弁)

現在仕様書案は西村史朗氏のところで、みんなの意見を伺いそれを集約してまとめる段階である。まだ落ちていところ、詰めなければいけないところが残っているので後1、2カ月かかる。

I	吉野全輝	天光	I
II	吉野全輝	天光	II
III	吉野全輝	天光	III
IV	吉野全輝	天光	IV
V	吉野全輝	天光	V
VI	吉野全輝	天光	VI
VII	吉野全輝	天光	VII
VIII	吉野全輝	天光	VIII
IX	吉野全輝	天光	IX
X	吉野全輝	天光	X

I. 光天連懇談会報告 (員長)

1987年10月19日午後6時より7時まで、北海道大学・学术交流会館において日本天文学会初日の講演終了後、光天連懇談会が約30名の出席により開催された。：司会は安藤祐康氏：

諸報告

* ハワイ報告 (別報あり) (前原氏報告)

1. マウナケア利用者委員会 (古在、小平、前原) 9月29日、30日
稼動中、建設中および計画中の望遠鏡について報告があった。

- ① UH88", CFHT, IRTF, UKIRT, CSO, JCMT (稼動中)
- ② WMKT (建設中)
- ③ JNLT, NNTT, VLBA, LEST (計画中)

この中で特に注目すべきことは、

- (1) NNTT計画が遅れ、MMT型から8m級シングルに変更を検討している。
- (2) NNTT用のサイトはJNLTが使えるかも知れない。
- (3) マウナケアのシーイングは中央値 0."4、ベストで 0."2 と評価される。
(望遠鏡、ドームによる劣化が問題)

などである。

2. UH2.2m望遠鏡の使用について

ハワイ大学は日本との協力関係を強めることを希望している。JNLTの建設については今後の進展を睨みながら進めるが、UH2.2m望遠鏡の観測時間を10パーセント程日本側に開放することを考えている。(現在でも実質的には10パーセント近くになっているが、これを定常的に保証する) その場合、日本側が

- (1) 財政的、マンパワー的に自立する、
 - (2) 観測データの処理も1FAの計算機の時間を圧迫しない、
- ことを原則としたい、との提案があった。光天連としては、望遠鏡の有効利用を考えていく上で、この件を十分に検討して行くべきであろう。

3. 家正則氏からのコメント： 西村史朗氏の努力でIRTF/SDASが三鷹で動き始めた。

* JNLT・ワーキンググループ報告 (家氏報告)

- 1. 対外説明用に東京天文台名で「大型光学赤外線望遠鏡計画」説明書を作製した(10月9日)。10月の天文台教授会の承認を経て文部省、協力者会議などに配布の予定である。
- 2. 63年度海外学術研究として望遠鏡関係の科研費要求を出している。4チームで米国・欧州の視察、情報交換及びハワイ側との交渉を行う予定である。
- 3. 63年3月のESO・VLTワークショップにESOからの招待があり、小平がJNLT計画の説明に赴く予定である。
- 4. アクティブ支持の実験について
 - 1) アクチュエーターの試作が進み、精度は荒いが応答の速い歪ゲージ型ロードセルと応答は遅いが精度の良い音叉型ロードセルの評価が行われている。
 - 2) 鏡面測定用シャックハルトマン装置の試作が始まった。年内には予備テストを開始の予定。
 - 3) 60cmテスト鏡を用いたスタティックな変形測定及び制御のテストを今年度中に行うよう準備を進めている。

* 仕様書について (安藤氏代弁)

現在仕様書案は西村史朗氏のところで、みんなの意見を伺いそれを集約してまとめる段階である。まだ落ちているところ、詰めなければいけないところが残っているので後1、2カ月かかる。

* 風洞実験について (安藤氏報告)

現在、京大防災研の桂先生の所でドームの風洞実験をして頂いている。乱流をドーム内に持ち込まないためにフードをつけた実験で一応結論がでていますが、天文台側ではフードの前を乱流がよぎることの方がかえって心配であるということでもう一度定量的な実験をお願いすることになっている。

* 国際ワークショップについて (小暮氏報告)

望遠鏡計画を進めていく上で、技術的なことで国際的レベルでの情報交換とかアドバイスを受けることとJNL TのPR (大蔵省、民間)も兼ねて、あるいはもっと実質的な意味での議論をするということで、88年度ちゅうにちいさなワークショップ (国外10人程度、3日位)を持ちたいと思っている。今日の運営委員会でおはかりしたい。

懇談会

* 体制WG報告 (関氏報告)

- 7月19日付けで、国立研の運営、とくに所外者が共同・協力して運営に参加する具体的シムテムに関連して、運営委員長よりいくつかの検討課題がWGに寄せられた。時間の制約もありWGとしては各人の意見を8月のシュミットシンボの際に持ち寄ることにした。特に重要で、早期に光天連として意見をまとめるべき問題としては、
 - 運営協議員会の任務・特に人事の扱いについて及び委員の選挙に関する考え方
 - 専門委員会、とくに分野別専門委についての考え方等がある。
- 8月27日、鴨方シュミットシンボの際に開かれた光天連懇談会では上記に関連した意見がいくつか出たが、まとめるには至らなかった。考え方の整理をWGで試みることにした。
- WGメンバー間で、電話による意見交換を行った。その結果、
 - 上記 1)、特に人事については、「人事交流の重要性を念頭においた上で、機関が責任を持ち、その philosophy を行動に移す観点が研究者の自立と community の発展にとって不可欠である」との指摘があった。
 - 上記 1)の委員選出については適材適所の観点から、基本的には関連研究者の集まりの責任で推薦し、更にひつように応じて分野・地域等のバランスを考慮する。「研究者の集まり」を言う場合、membership の confirmation が必要。
 - 上記 2)の分野別専門委に関連して
 - 任務として系・施設の運用/共同利用・共同研究の方針・計画/の他に、新しい分野・研究系をつくる時の host 役/人事・概算要求について 基本的、一般的討論も含まれる。
 - 光・赤外の場合、特にJNL Tの具体化・ハワイのイメージ作り、全国からの協力体制確立が重要。東京天文台案では系と分野別専門委とが一对一の対応ではないが、例えば(光・赤外)と(太陽)との二つに分けた場合と一緒の場合でそれぞれに長短有り。一緒でも必要に応じて分科会を作るなどすれば光・赤外の場合、充分対応できるであろう。(ハ)会議の能率化をはかるために、所外委員も加わった小委員会又は幹事会で原案を予めつくっておくことが絶対に必要である。その場合、専門委と光天連との密接な連携が不可欠。
 - 研究者の自治と健康の維持が両立するために、特に設立時から、所内外の理解と相当の努力が必要である。所外の積極的働きかけと参加が無くなると「仏つくて魂入れず」になりかねない。といった意見が出た。

* 時間の都合で討論なし

* まとめ (小暮委員長)

光天連としては、国立研への改組に当たって全国共同利用という立場からその組織、運営のあり方を検討し、必要があれば意見をまとめ要望していくという方法で進んで来た。現在、改組への具体的な検討が東京天文台改組準備調査委員会及び同調査室で始まっている。そのなかで取り扱われている大きな問題に、国立研における人事の扱い方、運営協議委員会、各種専門委員会の構成、任務と委員の選出法などがある。新しい国立研が共同利用機関として将来にわたって活力を維持するにはこれらの問題が基本的な重要性をもつもので、来年1月の光天連シンポジウムでも十分に議論されることを希望したい。

II. 第46回運営委員会

日時: 1987年10月19日

場所: 札幌市北海道大学理学部物理教室

出席者: 小暮、安藤、田中済、関、定金、家、磯部、兼古、清水

学会及び光天連懇談会終了後(19時-20時30分)次の議題で運営委員会が開かれた。

- 諸報告
 - 各W. G. の報告 (懇談会の項参照)
 - 海外学術調査(古在、家、岡村、小暮、成相(継続)・目的、チーム編成、国等)についての報告。
- プログラム相談会(11月9日)のメンバーとして、定金、舞原、若松の3氏の推薦を承認した。
- 光天連英文(JNL T)パンフレットを3月初旬発行をメドに作製する(田村、岡村)。
- 光天連シンポジウムの準備について

望遠鏡、観測装置(共通部分)、高分散分光器、仕様書案、組織と運用体制、プログラム問題(レフェリー制)等を盛り込む。(2ndサーキュラー別掲)
- JNL Tワークショップについて

3月21日 ESO・VLTワークショップでの紹介
11月29日-12月2日 JNL Tに関する技術シンポジウムの開催
- 国立研体制問題
 - 光天連によるアンケート結果の解析
 - 7つの専門委員会のうち特に総合計画、研究交流等
 - JNL T関連の具体的なこと、特に機器運用、基礎開発費など
 - 将来の客員部門、外部との関連のもちかた
 等についてよく議論をつめておく必要がある。

Ⅲ. 天文学研究連絡委員会（第13期第7回）会議メモ

昭和62年11月25日に上記委員会が開かれた。将来計画に関する概要を簡単に報告する。

1. VERA計画

VERA (VLBI for the Earth Rotation Study and Astrometry) 計画について、土屋（東京天文台）、笹尾（緯度観測所）両氏が出席され、計画の概要を説明されて天文研連委からの支持と推薦を要請された。研連としての推薦などの対応は次回審議することになった。

2. JNL T計画

小平委員が資料（大型光学赤外望遠鏡計画〔東京天文台1987-10〕および同仕様書案）を配布して計画推進の現況を報告した。それに関連して、世界における大型望遠鏡計画の現況、ハワイにおけるシーイングの改善など、若干の議論があった。

3. 大学における天文学教育研究の充実について

小暮委員から東京天文台・緯度観測所の国立天文台（仮称）への改組に伴い、今後、大学における天文研究の重要性が高まることから、研連委としての適切な対応を採られることの要請があった。当面の設備充実計画については次の大学から現状の紹介があった。

北大理学部―――大学院講座（宇宙物理学）設置（高窪委員より紹介）

東北大理学部―――学部2講座（電波天文、位置天文）設置 および付属実験施設の設置（高窪委員）

東大理学部―――3分野を持つ天文学教育研究施設および観測設備として木曾観測所移管とサブミリ波望遠鏡設置（堀委員）

（資料配布：東京大学理学部天文学計画について、62-11）

名古屋大理学部―――ミリ波望遠鏡の南天への拡張構想（小暮委員より紹介）

京大理学部―――2.3 m光学赤外望遠鏡を含む理学部付属天文学教育研究センター計画（小暮委員）（資料配布：天文学教育研究センター計画、および2.3 m新技術望遠鏡概略仕様、62-11）

それぞれの紹介の後若干の議論があった。

- ・大学における天文学は人が中心である。人の養成をまず考えるべきである。
 - ・個々の大学における計画を研連としてどこまで議論するのか。各大学の自主的努力に任せた方がよい。
 - ・自主的努力のためにも全国的支持が必要で、そのため研連からの推薦が望まれる。
 - ・個々の大学でなく、大学全般における研究教育の充実ということではよいのではないか。
- 以上の議論の後、研連としての対応は次回審議することになった。

4. 国立天文台（仮称）への改組について

古在会長から改組の準備進捗状況について報告があった。

- ・部門の構成について若干の変更があった。
- ・技術部は設置の方向で進んでいる。
- ・JNL Tは大型装置調査研究費要求のうち一括されているが最優先で推薦すべき大型装置として位置づけられている。
- ・大学院は併任方式を表明している。総合研究大学院との関係で当面は困難。
- ・改組準備調査委員会でアンケート調査を行った。

報告の後、評議員、運営協議員の選出方法などについて議論があり、当面、早々に発足すべき仮運営協議員の所外委員の選出について、天文研連としての対応を協議した。測地研連との関係もあるので直ちに具体的人選を行うのは困難であるとの見地から、東京天文台長と緯度観測所長に一任したが現在の改組準備委員会のメンバーが研連委によって推薦されたものであるから、そこで議論を基に決定し、時間的に間に合えば63年1月の天文研連で諮ることになった。

次回の天文研連は63年1月28日の予定

（文責：小暮、小平、寿岳、磯部）

Ⅳ. 東京天文台改組準備調査委員会（第7回会合メモ）

第7回委員会は1987年11月21日に東京で開催された。その要旨を報告する。

始めに古在委員長の挨拶のあと、JNL T計画の現状について小平委員から簡単な報告があった。そのあと議事に入った。

1. 改組アンケートの結果のまとめ。

海部委員からアンケート結果の要旨について報告があった。それによると回答（回答数397）の全体的特徴は次のようであった。

- 改組については極めて関心が高く、また、期待も強い。
- 改組の基本方針については高い支持（支持69%、不支持17%）があったが、その一方ではモノポリー（金、人の集中化）への不安を持つ人が多い（69%）。
- 新研究所の運営については厳しい注文（委員会、人事、平等、―――）があった。
- 共同研究・開発への意欲も多く見られ、人事交流と教育には高い関心と心配が寄せられた。この報告の後、会議ではとくにモノポリーの弊害とその対策について多くの議論があった。
- * 新研究所に予算がつきやすく、人どもの集中化によって大学とのギャップが拡大される？
- * 新研究所の運営が十分オープンでないと上の傾向が助長され、全国的な研究の発展と将来にわたる活性化が望めなくなる。
- * 大学における研究と教育の整備充実が最も重要である。
- * 研究所と大学における役割分担を明確にし相互の協力体制の強化を計るべきである。
- * 意識的に人事交流を推進するよう努力を積み重ねること。
- * これからは研究所、大学における人事を閉じたものと考えず、全国的な視野で議論することも重要ではないか。
- * 共同研究、客員部門への応募に積極性が見られる。（反論もあり）

2. 新研究所における各種委員会の構成・任務について。

改組調査準備室で検討中の案が紹介され、それにもとずいて議論があった。調査室案によると主な委員会はつぎのとおり

（所内外）

評議員会
運営協議員会
専門委員会

- (a) 光学赤外・太陽専門委員会
- (b) 位置力学地球回転専門委員会
- (c) 電波天文専門委員会
- (d) 理論・共通専門委員会
- (e) 総合計画専門委員会
- (f) 研究交流専門委員会

これらについて委員の構成（内外）、選出方法などが議論されたが具体的な詰めには至らなかった。

（所内）

教授会議 構成（教授、助教授）
幹事会議 教授会議の常任委員会的か、キャビネット的かの2案がある。
人事委員会 構成（所外をいれるか）と任務（人事配分の分野、技術スタッフの人事）について多くの議論があった。

その他の各種委員会

このうち、人事委員会については運営協議員会に設けられると予想される人事選考委員会および、長期的将来構想を扱う総合計画委員会との関係について討議された。

3. 台長選出方法 調査準備室案が次のように紹介され若干議論があった。

- 運営協議員会で討議、評議員会へ推薦
- 国立天文台（仮称）および国公立大学教授、教授経験者、各種機関の同等の職種のもので就任時の年齢64才以下のもの
- 任期4年、再任のときは2年、年齢に上限は設けない。

次回は昭和63年1月16日（土曜）の予定

（文責 小暮・小平）

V. 岡山・木曾観測プログラム相談会報告

日時：昭和62年11月9日 午後1時30分～4時30分
場所：東京大学理学部天文学教室会議室
出席者：定金、若松、舞原、黒河、小暮、竹内、尾崎、古在、牧田、西村、石田、前原、山下、清水、河合、中広

岡山天体物理観測所及び木曾観測所の施設・設備を利用する観測計画の打ち合せ（プログラム相談会）は古在会長の挨拶に引きつづき下記のような議題で行われた。

1. 岡山の観測プログラムについて

今回（63. 1-6月）の申し込み状況を集計すると
1) 188cmの暗夜希望は ~60夜/27単位=2. 2夜/単位
2) " 明夜 ~67夜/15単位=4. 5夜/単位
3) 91cmは 暗夜 10単位、明夜 9単位
4) 太陽クーデの夜間使用 4単位
となっており、188cmの暗夜は著しく混んでいる。明夜はどうにかなる数字である。91cmと太陽は問題はない。

2. プログラムの編成方針としては

- 1) 機器安定化のため、副鏡、観測装置の交換を最小にする。
- 2) ニュートンCCDのうち1つを木曾でやってもらうこととCsM（2時間）は相棒がないので堂平MCPと組んでもらうことを話し合いて調整すること。
- 3) 前回の申し込みのうち1月に回ってもらったものは必ずいれるが日数を延ばす余裕はない。
- 4) 次期のことを考慮すると年間を通じての調整はこれ以上は無理であるので今回は暗夜については2夜の割当を各月1・2夜作らざるを得ない。
- 5) 明夜については3夜以上、91cm、太陽については問題はない。
- 6) クーデPIASは公開されていないが受ける方向でやる。ということなどが了承された。

3. 暗夜の割当が2夜まで来たことにとともに、プログラム編成の基本的考え方としてどうすれば良いかの議論がおこなわれた。本格共同利用への改組に当たって光天連と観測所で早急に議論を始めることが要望された。

4. その他、木曾観測所に関する諸報告及び今後の共同利用、堂平観測所、海外望遠鏡の活用、機器開発とサービス体制等についての議論も行われた。

(文責清水)

光天連運営委員長及び岡山天体物理観測所長宛に次のような請願書がきましたので掲載します。

光学天文連絡会委員長 殿

岡山レフェリー制導入についての請願書

日本の光学天文学は、国内の他分野、及び国外の同分野に比べ遅れをとっていることは明らかです。この主な原因の一つに、国内の光学天文学の基幹設備である岡山天体物理観測所（以下岡山と略す）の施設（主に188cm）が十分有効に運用されていないことがあげられます。特に、諸外国の同一クラスの設備に大きく遅れをとった要因は以下の3点であると考えられます。

- 1) 写真乾板に代わる高性能検出器や、新しい観測機器の開発・導入が遅れた。
- 2) 提出される観測申し込みを批判的吟味なしに受け入れてきた。
- 3) 人事交流による活性化を図らなかった。

しかしながら、今、日本の光学天文学は大きな転機を迎えつつあります。最近になってCCD等の高性能検出器が岡山に導入され、機器開発の機運が高まってきました。これに刺激され、光学観測に興味を示す若手の人数も少しずつではありますが増加してきています。さらに、超一流の光学観測施設であるJNL T計画も順調に進行しており、光学天文学に寄せられる期待は従来になく大きなものとなってきています。東京天文台の改組を来年度に控え、岡山等の本格的な共同利用化が行われようとしているこの時期が日本の光学天文学を更に飛躍させる絶好の機会であるといえます。

このような事情に鑑み、私達は既存光学施設の有効利用を目的とし、岡山（主に188cm）の観測時間の割り当て方法にレフェリー制を採用することを強く主張します。現在、岡山188cmではプログラムが非常に混雑しており、1観測当たり3-4夜の割り当てになっています。これ以上の時間を必要とする観測が不可能なのはもちろんのこと、日本の場合、天候の周期がちょうどこのサイクルに相当しており、半数以上の観測者が有効なデータを取得できない状況にあります。このような共倒れの利用を避けるためには、プログラムを大幅に整理し、1観測当たり7夜程度の観測時間を割り当てる必要があります。まとまった成果が取得できるようになれ

日時：昭和62年11月11日(土) 10時～12時 岡山大学理学部天文台

しることが必要となります。このような観測時間の割り当てを行うには、研究の意義を評価し、価値の高い観測計画を選択しなければなりません。レフェリー制を採用することにより、若手には特に観測申込みで、レフェリーをする人には観測の意義を評価することで、共に厳しい試練が与えられることになり、来るべきJNL T時代に備えて、実力の向上を目指すことにもなります。

ここ数年来、レフェリー制の採否について、機会ある毎に議論されてきましたが、主に、以下の理由により見送られてきました。

- 1) 日本人のメンタリティーにそぐわない(シビルミニマムの保証)。
- 2) レフェリーをする資格を有する人がいない。
- 3) レフェリーをする程のプロポーザルがない。

私達は、これらの反対理由に対し、次のように考えます。まず、共同利用的な研究施設の使用に際しては、良い意味での競争状態が必要であり、シビルミニマムを保証する必要は全くありません。価値の高い研究に多くの労力と時間を注ぎ、日本の光学天文学のレベルを高めていく必要があります。また、2)、3)を解消できなければ、JNL Tの運用は不可能であるといわざるをえません。次の世代を担うべき若手として、私達は、1)、2)、3)のような研究姿勢を容認することはできません。日本の光学天文学を更に発展させるためには、より建設的かつ生産的な意見を集約していかなければならず、それが私達若手の義務でもあると考えます。

以上のような理由から、私達若手は岡山にレフェリー制を導入することを請願します。

昭和62年11月6日

- | | | | |
|------|------|------|------|
| 若手有志 | 青木哲郎 | 綾仁一哉 | 泉浦秀行 |
| | 市川隆 | 梅本智文 | 太田耕司 |
| | 與平敦也 | 佐々木実 | 柴田克典 |
| | 谷口義明 | 西川淳 | 能丸淳一 |
| | 濱部勝 | 洞口俊博 | 松村雅文 |
| | 門正博 | 吉田重臣 | 渡部潤一 |
| 代表 | 市川伸一 | | |

前原英夫 (1987年9月27日～10月5日) 前原英夫

VI. ハワイ報告(UH 2.2m望遠鏡の使用に関して)

1987年9月27日～10月5日のハワイ出張について報告する。古在、小平、前原はマウナケア・ユーザーズ・コミッティ・ミーティングに出席したが、これについては小平桂一氏の報告を参照していただくとして、ここでは表題の件について報告する。この大筋は既に行われたHall所長との話し合いに含まれているが、さらに A.Stockton(2.2m鏡のディレクター)、J.Heasley(計算機関係の責任者)および P.H.Rhoads(プログラマー)との天文学研究所(IFA)における話し合いを経てまとめたものである。

1. 観測申込

UH 2.2m鏡は3ヶ月毎のプログラム編成で順調に運営され成果がえられている。UHとしては日本との協力を推し進めるつもりであり、日本の天文学者に対して10パーセント程度の時間を割り当てることができる。これまでもある程度割り当ててきたが、一定の枠を使用するに際して、財政的に自立すること、マンパワー的に自立すること、を原則(条件)としたい。例えば日本人の観測を助ける support scientist をハワイに常駐させることを提案する。この枠のプログラム編成作業をどう実施するかは日本側と折衝の上で決めていきたいが、日本側にもこれを処理する組織または委員会が必要であろう。

2. データ処理の現況

CCDなどを用いた観測データが大量に増え、IFAの計算機(VAX11/785)の使用時間は急速に飽和状態に近づいている。これまでIFAではZODIACという画像処理システムを使ってきたが、現在のマンパワーではこれを継続して保守・運用して行くことが困難になってきたので、今後このシステムの開発は凍結したい。その代わりに、S.T.Sci.Inst.とKPNOで共同開発している IRAF(Image Reduction and Analysis Facility)の導入を検討している。このシステムは VMSかUNIXのOSで動く汎用な画像処理ソフトウェアであり、今後も彼らの豊富なマンパワーを駆使して開発および保守を行って行くと考えている。

3. 日本の枠のデータ処理

以上のような状況の下で、日本人が観測の帰りにIFAでデータ処理をすることは、UHのスタッフや学生の多くから歓迎されないことである。日本側が supporting staff を派遣し使用できる計算機を独自に置くか、またはIRAFが走る 画像処理ワークステーション(例えば2.5万ないし5万ドルで買える"Sun"ワークステーション)を購入しIFAの計算機システムに組入れるのはどうか。

4. 考察

このような状況の下で、UH 2.2m鏡を如何に有効に使うかは、われわれ光学赤外の研究者全体にとって一大関心事である。それは、JNL T建設の準備段階として捉えることができるし、また、目下議論されている岡山の188cm望遠鏡のプログラム編成とも密接に関係してくるからである。日本の枠のプログラム編成は国立研を通じて行うことになるだろうが、詳細は今後の議論に委ねるとして、データ処理についての解決策を一考して見る。2.2m鏡のデータは国内で既に処理が行われており、例えば木曾観測所のSPIRALを移植すれば各地の計算機施設でデータ処理が可能となる。一方では、IRAFのソフトを導入・移植することも(東京天文台の西村氏らにより)試みられており、近い将来動くようになるであろう。現状ではUHに計算機を置くのはそう簡単ではないので、当座のデータ処理は主に国内で行い、経験を積みながら対処して行くのが現実的な方策だと思われる。

以上

Ⅶ. お知らせ

* UC (ユーザズ・コミッティ) ミーティングの開催

日時: 昭和63年1月12日(火) 午前9時半~12時半
場所: 東京大学山上会議所(201/202号室)
議題: (プログラム案)

A: 望遠鏡のステータス・レポート

- (1) 岡山188cm鏡、91cm鏡のプログラム 西村
- (2) 堂平91cm鏡の共同利用 近藤
- (3) 木曾シュミットの共同利用 石田

B: 報告、計画等

- (1) JNL T、UH2.2m望遠鏡 小平
- (2) 東京天文台の国立研への移行 古在
- (3) 海外望遠鏡のレフェリー制の調査 谷口
- (4) 若手研究者からの提案 市川

C: 討論

この会合はオープンで行われますので多数御出席下さい。

* 光天連運営委員会

日時: 昭和63年1月12日(火) 午後1時30分~4時
場所: 東京大学理学部天文学教室
議題: 1. 次期運営委員選挙日程等
2. U. C プログラム案の検討
3. JNL Tシンポジウムの状況(報告)
4. 改組後の光学、赤外線関係共同利用体制
・ 専門委員会、共同利用委員会、プログラム委員会、ユーザズコミティ、
機器開発委員会、共同利用事務体制、木曾・堂平との関係
5. 光天連次期体制
6. 英文パンフの状況(報告)
7. その他 宇電懇との関係

* 光天連シンポジウム

日時: 昭和63年1月26日 午前10時 ~ 27日午後3時
場所: 東京大学附属図書館会議室

* 会員の移動

住所変更 長谷川一郎

土屋 谷口俊明 西川 隆 能丸 淳一
 坂部 隆 渡口 俊博 松村 雅文
 門 正 雄 吉田 重雄 渡部 潤一
 代表 市川 隆一